

[評者]

佐藤尚武

順天堂東京江東高齢者医療
センター臨床検査科科长



異常値の出るメカニズム 第7版

河合 忠 編

山田 俊幸, 本田 孝行 監修

●B5・頁304 2018年3月

定価：本体6,000円＋税

[ISBN978-4-260-03240-7]医学書院刊

『異常値の出るメカニズム 第7版』が刊行された。本書は1985年に初版が出版されて以来、30年以上にわたって版を重ねている臨床検査医学領域の名著である。一度は目にしたことのある医療関係者も多いのではないだろうか。

私は初版以来全ての版に目を通してているが、今回はこれまでで最も大きな変更があった。まず、初版からの編著者であった河合忠先生(自治医大名誉教授)が監修に回り、山田俊幸先生(自治医大教授)と本田孝行先生(信州大教授)による編集になった点である。また、本書の英文名がLaboratory MedicineからKawai's Laboratory Medicineに変更された。本田先生は今回から編者に加わっているが、実は第6版の書評を書いておられ、私はそれを読んだ覚えがある。そこには、信州大でReversed Clinicopathological Conference(RCPC)を実施するにあたり、『異常値の出るメカニズム』を10回以上精読したと書かれていた。本田先生自身が本書の愛読者だったわけである。

次の変更点は本の厚さである。本書は初版以来、版を重ねる度に徐々に厚くなってきていたが、今回初めて少々薄くなった。実際、第6版は500ページに迫るページ数だったが、第7版は300ページほどになっている。この変化は内容にも反映されており、各章が「総論」「基本検査」「基本検査に準ずる検査」で構成されるようになった(9, 11, 14~17章を除く)。そして内容がかなりそぎ落とされ、読みやすくなっている。また、基本

的検査を中心に解説するという本書のコンセプトが明確になった。

三番目は表紙をはじめ、全体がカラフルになったことである。以前から多色の図表が数多く用いられていたが、今回は色の種類が格段に増え、大変きれいにかつ一見して理解しやすくなっている。本書の特長であった河合先生の原因図は、今回も多くが踏襲されているが、新たな図も多数追加されている。

四番目は、いきなり末梢血液一般検査から章立てが始まっており、総論にあたる検査値の見方は最終の17章に移動している点である。尿や便、穿刺液など、血液以外の材料を検体とする検査も後方に移動した。血液検査を、末梢血液一般検査と凝固線溶検査に分けるといった変更も行われている。

全体がスリムになったとはいえ、新たな内容も追加されている。いくつか例を挙げると、感染症の検査では質量分析法による同定や、髄液培養におけるグラム染色による原因菌推定のフローチャートが追加されている。遺伝子検査は一新され、具体的に詳しい内容になっている。総論(17章 検査値の見方)では、共用基準範囲が収載された。

今回の第7版は、これまで本書が有していた価値を損なうことなく、新たな魅力を付加し、かつ利用しやすくなっている。これまでの版以上に多くの読者に愛読され、これにより臨床検査(検体検査)がより有効に利用されることを期待している。